DRESS から CLOTHING へ

1960年代から1970年代へかけて、現在ラグビー躍進の時代に、プレーが進化した割には、服装は旧態のままでした。イングランド協会創立100周年の頃から一挙にグローバル化が加速して、W杯の開催とともに目まぐるしい展開をとげましたが、競技規則の第4条プレーヤーの服装は「PLAYERS' DRESS」とされていました。

この規程は1980年代から1990年代に渡っても変わらないままでした。その間に細かい問題も生じましたが、危険防止が主眼で、buckleとringが特に注意されました。肩当てと鋲スタッドはしばしば問題となりました。

2000年ミレニアム改正版で、「PLAYERS' CLOTHING」として、定義も加えて形を整えられているのは、その間の推移をまとめた結果です。

dress :衣服に対比するものは、裸ではだめという意味であって、スポーツに於いても「着飾る」ことは、紳士の身だしなみでありました。レフリーも着飾りました。

clothing :必要性と実用性からきた衣服は、識別という大きな役目と競技の発展という目標を掲げています。今回のW杯の途中でも、jerseyを替えるという珍事がありました。

dressからclothingへ変わりましたが、その間一貫していわれていることは、危険防止です。芝生、ライン、照明、シャワー設備など競技場も設備されてきました。布や固形品の素材の品質と製法が著しく進歩しました。一方、ラグビーのプレーそのものも進歩し、活動的・流動的になりました。プレーのための工夫に加えて好みも加味されるようになりました。最近はプロ化とともに商業主義による要素も目立つようになりました。

さて、問題のjerseyの襟(collar)は、ちゃんとした上衣の必需品ですが、競技には必要のないものです。長袖が七分から半袖になったように、危険性がなければ、特に手首まで被っているものでないといけないというものではありません。以前よりずっと幅の狭い、格好よい襟のjerseyが着用されるようになりました。襟のないTシャツでも生地の素材など工夫がなされれば、着用は可能であって、一方に不公平が存在しなければよいのです。イコールコンディションで戦うという、ラグビーの大原則が損なわれていなければよいのです。

2003.11.18
西川　義行